

2017年9月3日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 8章 25～40節

説教：導く人がなければ

はじめに

イエス・キリストが墓からよみがえられ、弟子たちに現れたとき、こう言われました。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(1章 8節)

それから一週間して約束どおり弟子たちの上に聖霊が降り、それをきっかけにして多くの人たちが救われ、エルサレムに世界最初のキリストの教会が建てられました。いっばうこのことを心良く思わない人たちもいました。律法学者たちからの嫌がらせや妨害が止みません。あるときとうとう、教会の長老であったステパノが逮捕され、石で殺されるという事件が起き、迫害が激しくなります。このことから、多くのクリスチャンたちはエルサレムから地方に散らされていくこととなります。彼らが向かった先の一つがサマリヤ地方です。そこで福音を宣べ伝えると、サマリヤの人たちも救われていきました。「あなたがたは、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土でわたしの証人となる。」気がつくと、イエスがあらかじめ語られたとおりのことが起きていました。しかしイエスは、「地の果てにまでわたしの証人となる」とも語っていました。「地の果てにまで。」このことがどのようにして実現していくのか、今日の箇所から見ていきます。

1 ピリポと宦官のエチオピヤ人

1) 聖霊の働き

殉教したステパノは、エルサレム教会の長老でした。そのステパノと一緒に長老という立場で活動していたのがピリポという人です。ステパノが殺され、迫害が激しくなったとき、ピリポはほかのクリスチャンたちとともにサマリヤに降り、そこでイエス・キリストを宣べ伝え、多くの人々が救われていきました。

ピリポはいつかまたエルサレムに戻ろうと思っていたのですが、御使いが現れ、「あなたは立つて、南に行きなさい」と言われます。ガザは、ピリポがいる場所から見ると、エルサレムを通り越したもっと南のところにあります。何をするのかはわかりません。とにかく行ってみました。そうすると、向こう側に馬車が見えてきました。そのとき御霊がピリポに、「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」と語ります。

2) 導く人がなければ

馬車に乗っていたのは、エチオピヤ人女王カンダケに仕えていた宦官です。エチオピヤ人とありますが、現在の国で言えば、エジプトの南にあるスーダン地域のことだろうと言われています。ピリポが近づくと言われている声が聞こえてきます。首をひねり、考え込みながら読んでいます。そこでピリポは声をかけます。「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」そうすると宦官は答えます「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」ユダヤ人であるあなたに

聖書のことばを解き明かしていただきたいとお願いをします。

3) これは自分のことなのか、ほかの人のことなのか

宦官が読んでいたのはイザヤ書 53 章 7, 8 節でした。「ほふり場に連れて行かれ行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことをだれか話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」

宦官はペリポが馬車に乗ると、堰を切ったようにこう尋ねます。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」

この宦官は、イザヤ書に書かれている文章を、もしかして自分のことなのか切実なこととして受けとめています。

普通はどうでしょうか。聖書は世界のベストセラーだと聞き、教養として聖書を読み始める方がいます。私もかつてまだ信仰をもっていなかったとき、教養のために聖書の一部を読んだことがあります。福音書にはところどころ良いことも書かれていると感心する。しかし、ほかの箇所は何か書いてあるのかほとんどわからない。まして、そこに書かれていることが自分のことだとはまったく思いませんでした。聖書のみことばが、他人事ではなくて、まさに自分自身のことであるとわかったのは、ずっと後になってからのことでした。

宦官がこの時、聖書を他人事として読めなかったようです。なにか悩みがあったのかも

しれません。この悩みを解決するヒントがあるかも知れないと思って聖書を開いてみた。そうしたら、「彼のいのちは地上から取り去られる」という文字が目飛び込んできた。まるで占いのお告げを聞いたような面持ちで、心が落ち着かない。そんなとき、ペリポが現れました。宦官はまるでわらをもつかむ思いでペリポの話に耳を傾けます。

2 イエス・キリスト

1) ほふられる羊

ペリポは何を語ったのか。35 節。「ペリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。」

相手は外国人です。外国人のために特別なことを語ったのでしょうか。いいえそうではありません。聖書はユダヤ人にだけ書かれたものではありません。すべてのひとのために書かれたのです。ユダヤ人であろうがエチオピア人であろうが、聖書は一つ。救いは一つです。

ペリポは、宦官が開いていたイザヤ書から始めます。そこに書かれている「彼」とはだれのことか。これはどこか遠くの人のことではない。つい最近、エルサレムの丘に立てられた十字架の上で死なれたイエス・キリストのことを指しているのだ。どうしてそれがわかるか。イエスが十字架におつきになるときの様子が、まさにここに書かれているとおりでいいのです。イエスがローマ総督ピラトの前で裁判を受けられたとき、ピラトは、この男には罪がないと認め、最初は鞭で打って釈放するつもりでした。しかし民衆が叫ぶ声がますます激しくなっています。「十字架だ。十字架につけろ。」このままでは暴動になってしまう。そうなれば自分の首がとぶ。その

ことを恐れたピラトは、民衆の声を聞き入れ、イエスを処刑せよとの判決を下します。処刑される理由がないのに処刑される。こんな理不尽な話があるでしょうか。普通なら叫ぶでしょう。「私は無罪だ。釈放してくれ。」しかしこの方は何も言いません。ほふり場に引かれていく羊のように十字架におつきになり、すべてのものをお捨てになった。それを見ていた周りの人たちは、好き勝手なことを叫んでこの方を卑しめた。そのようにして死んで行かれた。イザヤが預言したとおりでした。

宦官は、「だれかほかの人についてですか」と尋ねました。その質問に対しては、そのとおり、これはイエスについて書かれている。そう答えます。では、それだけか。あなたが感じたように、実はこれはあなた自身のことでもある。なぜそう言えるのか。

あなたは、イザヤが預言したこの救い主と関係がないと言い張れるだろうか。あなたも十字架に追いやって殺したのではないか。私はユダヤ人ではない。外国人だ。あのとき私は十字架の周りにいなかった。私は関係ない。そんなふうに言い逃れますか。

でも、あなたはここを読み、なにを感じたか。「これは自分のことなのか」と恐れていたのではないか。どうしてそう感じたのですか。あなたは何かを恐れていたのではないですか。高い地位にある自分だけれど、いつか誰かに裏切られ殺されるかも知れない。殺されずに済んだとしても、平穏に生きていけるのかわからない。たとえ平穏に生きられたとしても最期は死ぬ。そんな自分のいのちを思うと、なんとちっぽけでなんとはかないものだろうか。財産や名誉やこの地位があったとしても、結局、人のいのちは、ほふり場に引かれていく羊のようなものではないのか。その

ときになって、神に対していろいろ文句を言ってもどうすることもできません。神のひとり子を十字架で殺した罪がある以上、あきらめて死というさばきを受け入れるしかない。ここに書かれている事は、イエスのことであるけれど、あなたのことでもある。

2) とりなしをする羊

しかしそこでもがっかりしてはならない。あなたには望みがある。イザヤ書 53 章 12 節後半にこう書いてある。「彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

あなたは神にそむき罪ある者だけれど、もしその罪を悔い改めるならばイエス・キリストは、あなたの罪を負ってくださり、父なる神の前に立ち、あなたのためにとりなしてくださるので、決してさばかれることはない。地上のいのちを終えたとしても、あなたには永遠のいのちが与えられる。どうしてそんなことが言えるのか。主イエスは死からよみがえられた。この方は死で終わらなかった。それと同じことが私たちにも与えられる。それが救いの約束です。私たちはそのことの証人なのです。あなたはこのことを信じますか。

これを聞いたエチオピア人は、自分も神の子キリストを十字架につけて殺した者であることを自覚し、その罪を告白し、イエス・キリストを救い主として受け入れます。こうして彼は洗礼を受けていきます。

3 地の果てにまで (1 章 8 節)

このようにして、聖書のみことばの解き明かしを聞いたエチオピア人が救われていきます。「地の果てにまでわたしの証人となります」と語ったイエスのことばはこのように

現実のものとなっていきます。

いったいだれがエチオピア人を救ったのでしょうか。ピリポでしょうか。いいえ。彼は聖霊の声に従って、行くべき所に行き、語るべきことを語っただけです。すべては神の御手の中で行われます。イザヤの口をとおしてあらかじめ語っていたことがイエスをとおして成就します。

でもそれだけではすべてを言い尽くしていません。救いのみわざは、神おひとりがするのではない。エチオピア人はなんと言ったか。「導く人がいなければ、どうしてわかりましょう。」私たちもあるとき導く人が与えられて、聖書のみことばを聞きました。そして信じました。今度は私たちがだれかを導く番なのかも知れません。私にはできないと恐れることはありません。何度も言いますが、人がするのではない。聖霊の働きの中でひとりひとりが用いられていきます。聖霊が働くとき、私たちは持っているものをそのまま差し出せばよい。神はそれを尊く用いてくださいます。